

2016年度「タイムスふれあい事業」

生きる力 後押し

県内の福祉関係の小規模施設や団体を支援する2016年度「タイムスふれあい事業」の助成先が、8団体・施設に決まった。ことしは13件の応募の中から、書類審査と現場視察を経て決定した。助成額は総額約200万円。04年度から昨年度までに、のべ67団体に2140万円を贈った。贈呈式は15日午後2時から沖縄タイムス社で開かれる。団体・施設の活動を紹介する。

助成8団体・施設 きょう贈呈式

IT活用 就労の幅広げる

「共に人生を楽しもう」をテーマに、県内在住の脊髄損傷者やその家族に対し、日常生活に関するさまざまな悩みを同じ仲間として共に考える相談支援(ピア・サポート)を実践してきたNPO法人「県脊髄損傷者協会」。

1984年に発足し、ことしで32年目を迎える。会員は91人。支援の対象は脊髄損傷者に限らず全ての重度障がい者で、活動も車いす障がい者スポーツの振興やバリアフリー推進活動など多岐にわたる。

昨年10月には重度障がい者の就労を支援する就労継続支援A型事業所として「障がい者ITサポートおきなわ」を開設。仲根建作理事長は「ITを活用した社会参加と就労の可能性を広

NPO法人「県脊髄損傷者協会」



県脊髄損傷者協会の仲根建作理事長(前)と会員ら。浦添市内開

げる取り組みに今後も力を入れたい」と話す。

来年6月には、全国脊髄損傷者連合会の第16回定期総会が沖縄で開催される。全国各地から

脊髄損傷者のリーダーが集い、障がい者福祉の向上などについて研究協議する。助成金は、大会参加者への移動手段確保や宿泊対応経費などに充てる予定だ。

障がい者の生活向上 応援

NPO法人「チーム沖縄」は那覇市首里の県総合福祉センター内の事務所を拠点に、在宅療養中の障がい児や家族に対し、医療福祉制度や就労など暮らしにかかわる問題へのアドバイスや似顔絵プレゼントなどの活動を行っている。

イラストレーターで賛助会員の喜屋武清一郎さんは、在宅療養中や長期入院中の障がい児を訪ね、描いた似顔絵をプレゼントする支援活動を続けており、家族から喜ばれている。

また、名護市の沖縄愛楽園を訪れ、入所者の体験を聞いた上で、差別や人権について考えようと年に2～3回程度で研修会も開いている。

助成金は古くなったパソコン

NPO法人「チーム沖縄」



療養中の家族にイラストをプレゼントしたチーム沖縄の上里一之理事長(後列右から3人目)ら。チーム沖縄提供

を買って替える費用に充てる。新たな福祉制度やサービスなどの情報をインターネットで集めて相談に生かしたり、会員への連絡やブログでの情報発信などに活用していく。

上里一之理事長(53)は「障がいのある人も同じ社会の一員として快適に生活できるよう支援していきたい」と話した。

ミシン購入で新製品に夢

知的・精神・身体に障がいのある20～60代の16人が利用する障害者支援事業所「ゆいまーる」。利用者はパンの製造・販売から、縫製作業、空き缶プレスまで、さまざまな作業を、障がいの程度や個性に合わせて行っている。今回、助成金は、縫製作業のためのミシン購入費に充てる予定だ。

縫製作業は、裁断、ミシンがけ、平織り、仕上げなどを分業し、皆で一つの製品を作り上げる。端切れや古着を利用してエコバックやコースター、マットなどを作り、バザーなどで販売している。

作業になくてはならないミシンは3台あるが、22年前の開所当時からある旧型の中古品で

障害者支援事業所「ゆいまーる」



端切れや古着を活用した布製品作りに取り組む利用者や職員ら。那覇市近郊の障害者支援事業所「ゆいまーる」提供

「壊れては修理」を繰り返している。今回、マットなど、厚手の物も縫えるものを購入する計画だ。

「巾着を作りたい」と利用者は、新しいミシンの到着を今から心待ちにしている。下地利恵子代表(65)は「縫製製品の種類をもっと増やしていきたい」と意気込んでいる。

食料品で貧困世帯 手助け

ことし活動10年目を迎えるNPO法人「フードバンクセカンドハーベスト沖縄」。企業や個人から寄贈された食品を、支援施設や団体を通して、食べるものに困っている家庭に届けている。

食品ロスを減らそうと、主婦だった代表理事の奥平智子さん(42)が立ち上げた。現在10人のスタッフが、ボランティアとともに、食品の箱詰めや管理作業に当たっている。

支援先の多くがひとり親世帯。3人に1人の子どもの貧困状態にあると推計される県内で、存在意義はますます高まっている。

しかし家計は火の車。運営資金、マンパワーともに不足し、

NPO法人「フードバンクセカンドハーベスト沖縄」



高騰された米や缶詰を手にするNPO法人「フードバンクセカンドハーベスト沖縄」のスタッフやボランティアら。那覇市近郊

資金繰り、人繰りに毎年、頭を悩ませている。

助成金はパソコンやタブレット端末の購入費に充てる予定だ。企業から提供を受けた食品は安全管理のため、一つずつ、

個数や賞味期限、提供先を記録しなければならぬ。独自に開発したインターネット上で管理するソフトとともに「複雑な作業の効率化を図りたい」と(奥平さん)という。

人間関係つくる自立支援

知的障がい者などの就労をあっせんする「NPO法人エンジェル工房」。安里みさえ代表が7年前に設立し、これまで多くの障がい者や引きこもりの人々を社会に送ってきた。

安里代表自身も、障がいがある子ども2人の母親。特別支援学校を卒業した後の子どもたちの将来が心配になったことが、同法人の設立を後押しした。

現在、13人の利用者がいる。年齢層は20～64歳と幅広く、古紙回収や缶、ペットボトルの分別、リフォーム事業などの活動に取り組んでいる。

安里代表は「障がい者が仕事に就いたとしても、コミュニケーション不足で退職するケースが多く見られる」と課題を指摘。

NPO法人「エンジェル工房」

そのため同施設では仕事の報告、連絡、相談の徹底を計りながら人間関係を構築する自立支援を支援者7人でサポートしている。支援者と利用者、家族が

親睦を深めるピクニックなどの行事も好評だ。

今回の助成金は、活動拠点となっている建物の屋根修復などに充てる。



毎年開催しているエンジェル工房の支援者と利用者、その家族が親睦を深めるピクニック(安里代表提供)

エイサー披露 地域と交流

勇ましい太鼓の音と、威勢のいい掛け声が響く福祉施設が那覇市の田原公園の一角にある。障がい者の軽作業や古紙・空き缶回収、清掃作業といった活動を支援する「NPO法人障がい者支援センターふくぎ」(大城和宏施設長)だ。ふくぎの利用者が日々練習を重ねるのは伝統芸能・エイサー。高齢者施設やイベント会場で披露し、地域を元気づけている。

ボランティアで訪問活動を始めたのは5年前。大城施設長は「地域の人に、障がい者がどういる存在か理解してほしい。この子たちの輝ける場所が増えてほしい」とほほ笑む。

今回の助成金で10年来のエイサー衣装を新調する。利用者の

NPO法人「障がい者支援センターふくぎ」



息の合った演奏で地域を元気づけるエイサー隊「ヒヤカチふくぎ」那覇市・田原公園

美さんは「みんなすごく明るくなった。この子たちの輝ける場所が増えてほしい」とほほ笑む。

今回の助成金で10年来のエイサー衣装を新調する。利用者の

赤嶺絵美さん(28)は「サイズが合わなくなったものもあり、新しい衣装はうれしい」。池宮秀友さん(31)は「いつか東京で踊りたい」と力を込めた。

個性を生かして社会貢献

名護市に今月オープンしたばかりの「LIFE☆CAFE(ライフ☆カフェ)」は、コーヒーやカレーの店。NPO法人ジャンプの就労移行支援事業所だ。

沖縄市の企業、ヨシモトコーヒーが持つ店舗を借り、協力して運営する。知的発達に支援が必要な20歳の女性4人が接客や調理補助、清掃に当たっている。

店舗は入り口やトイレに段差があるため、今回バリアフリー工事費の一部の助成を受けることになった。石垣育子理事長は「車いすのお客さんが気軽に入れるようにしたい」と望む。

ジャンプは石垣理事長ら当事者の親が立ち上げた「やんばる親の会」が前身。情報交換に始まり、児童の放課後デイサービ

NPO法人「ジャンプ」



開店を祝い、コーヒーを乾杯する「LIFE☆CAFE」のスタッフら。名護市東江

ス、特別支援学校卒業後の社会生活訓練校と、ニーズに合わせて活動を広げてきた。

カフェは訓練校を出た当事者の受け皿になる。石垣理事長は

「当事者の個性を生かして社会貢献していきたい」と語る。今後も、本格的に就労できる会社や、グループホームの設立を構想している。

洗剤作りや清掃作業 奔走

障がい者の就労や社会参加・自立支援などを目的に1995年、くらしき作業所として設立。2007年にNPO法人に認可され、12年には就労継続支援B型事業の認可を受けた。

EMを使った洗剤や液肥などの製造・販売、沖縄市内の児童公園8カ所と市養鶏団地組合内の草刈り・清掃作業などを手掛ける。現在は、14人の利用者が通い、スタッフ6人で日々の支援に携わっている。

「汚れがよく落ち、手荒れもなく好評」というEM洗剤は、2リットルで年間約3500本を売り上げる人気商品。口コミで評判が広がり、県外や那覇、名護市からも注文が入る。洗剤作りのほか、手工芸作業で日々使う

NPO法人「くらしき」



EM洗剤作りや清掃作業で日々精を出す「くらしき」の利用者と職員ら。沖縄市池原

いすが老化し支障を来しているため、今回の助成は利用者のためのいす購入に充てる。

「いつも明るく元気よく」がモットー。ピクニックなど年間行事で親睦も深めている。瀬高苗子理事長は「みんな家族のよう。作業を楽しみにしている。助成は大変助かり、やりがいにもつながる」と話した。